



世界文学全集

37

ショーロホフ

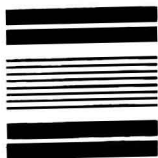
静かなドン

2

横田瑞穂訳

河出書房

© 1968



カラー版 世界文学全集 第37巻

ショーロホフ 静かなドン2

昭和43年1月15日初版印刷

昭和43年1月20日初版発行

訳者 横田 瑞穂

装幀者 亀倉 雄策

発行者 河出 朋久

印刷者 澤村 嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

定価 850 円

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

目次

静かなドン

2

第3巻

第6編 8

第4巻

第7編 300

第8編 500

年表 639

シヨロホフをめぐって 645

『静かなドン』参考地図 5

卷頭口絵 帰国のバイカル号船上のショーロホフ

畔田藤治氏撮影（1966・5）

本文カラーさし絵

ロバート・J・リー

© '1967 Robert・J・Lee

装 幀 亀倉雄策

静
か
な
ド
ン

2

横
田
瑞
穂
訳

父なるおまえ、栄えある静かなドンよ、
わが養い親なるドン・イワーノヴィチよ、

おまえはほめたたえられていた、
よき言葉もてほめたたえられていた、

おまえの流れば常に速い、と、

おまえの流れば速く、また常に清い、と、

しかるに今、ドンよ、おまえは濁りに濁り、
上流より下流へかけ、すべてこれ濁流となり終わった。

栄えあるドンの答えて言うには、

《どうしておれが濁らずにいられよう、

おれはわが子なる美しき鷹どもを、

よき男の子ら——ドンのコサックどもを放ちやった、

いま、わがけわしき岸辺は、これら男の子らをうしなっ

て洗い流され、

これら男の子をうしなつて、砂州は黄色い砂をとかして、
流れを濁らせるのだ》

『静かなドン』参考地図



主要人物

メレホフ家（典型的なコサック中農）

バンテレイ・プロコフイエヴィチ その家長。元近衛コサック下士。

イリーニチナ その妻。

ペトロ（ビョートル） その長男。下士から昇進してコサック士官となり、のち白衛軍に投じて戦死する。

ダーリヤ ペトロの妻。

グリゴリー・バンテレヴィチ（グリーンシャ） 次男。この

小説の主人公。コサック士官、革命後、最初赤衛軍に投じ、のち白衛軍の有力な指揮官となる。

ドゥニャーシカ 長女。のちミシカ・コシェヴォイの妻となる。

コルシュノフ家（部落の富農）

グリシヤカじいさん 祖父。

ミロン・グリゴリエヴィチ 家長。コサックの富農。

ルキーニチナ その妻。

ミチカ 長男。コサック兵。グリゴリーの友だち。

ナターリヤ（ナターシヤ、ナターシカ） 長女。グリゴリー・

メレホフの妻となる。

ステパン・アスターホフ メレホフ家の隣人。ペトロと同年輩の

コサック。その妻をめぐってグリゴリーとの間に争いがおこる。

アクシーニヤ（アクシュートカ、クシェーシヤ） その妻。こ

の小説の女主人公。グリゴリーの情婦となる。

エヴゲーニー・リストニーツキー ドン地方有数の地主貴族、

退役老將軍の息子。帝政派のコサック士官。

セルゲイ・プラトノヴィチ・モホフ 部落に蒸気製粉所をも

つ富裕な商人。

エリザヴェータ（リーザ） その娘。墮落したブルジョア娘。ミチ

カ・コルシュノフに犯される。

シュトックマン（オーシブ・ダヴィドヴィチ） 鉄工。ポリシ

エヴィク。部落に党の細胞をこしらえる。

シュトックマンの教え子たち

ミシカ・コシェヴォイ 貧農コサック、のちグリゴリーの友だ

ちとなり、ドゥニャーシカの夫となる。

イワン・アレクセーエヴィチ モホフ製粉所の機関士。

ワレート 製粉所の労働者。

フリストーニヤ 貧農コサック。

ブランチューク エヴゲーニー・リストニーツキーの隊の志願兵。ボ

リシェヴィク。

第
3
卷

I

一九一八年四月、ドンでは大分裂が実現した。北部の諸管区——つまり、ホビョール、ウスチ・メドヴェージツァー、そして上流ドン管区の一部の前線コサックたちは、退却中の赤衛軍諸部隊と行動を共にして去って行った。一方、下流諸管区のコサックたちは、かれらを追って州境へと圧迫していった。

ホビョールのコサックたちはほとんどひとりのこらず、またウスチ・メドヴェージツァーの者たちはその半数が、それから上流ドンの者たちは——ごく少数だったが、赤衛軍といっしょに立ち去ったのであった。

一九一八年にいたり、初めて歴史は、上流地方の者と下流地方の者たちとを、決定的にひき分けたのである。しかし、分裂のきざしは百年前からすでに認められていた。当時、アゾフ海沿岸地方のような肥沃な土地も、ぶどう園も、そしてゆたかな獵場も、また漁場をも持っていないかった北部諸管区の貧しいコサックたちは、ときどきチュルカツスクから離脱し、大ロシアの領土を思うままに襲撃して、ラーシンをはじめとして、セカーチにいたるあらゆる謀反人たちの砦の役をつとめていたのであった。

ずっとおくれた時代になって、ドン軍がすっかり統治の首におさえ

つけられ、ただ鋭い不満の呻き声をあげるだけになった時にさえも、上流のコサックたちは、公然と起ちあがり、アタマン（頭目）たちに率いられてツァーリの土台を揺りうごかした。かれらは国軍と戦い、ドンの河畔で隊商を略奪し、ヴォルガに移り、うちくだかれたザボロジエに暴動をそそのかした。

四月の終わりのころには、ドン地方の三分の二が赤衛軍によって放棄された。州政権樹立の必要がはつきり問題となってくるや、南部で戦っていた白衛軍コサック諸部隊の指揮官たちによってコサック会議召集の提案が行なわれた。臨時ドン政庁と、各コサック村の代表、各部隊の代表者たちとの会合の日取りは、四月二十八日、ノヴォチュルカツスクにおいて、ということにきめられた。

タタールスキー部落でも、四月二十二日にヴォーシエンスカヤ村で、ドン・コサック代表者会議へおくる代表たちを選ぶための村の集会（頭目）がひらかれるということを伝えるヴォーシエンスカヤ村アタマン（頭目）からの文書がうけとられた。

ミロン・グリゴリエヴィチ・コルシュノフが、集会で、その文書を読みあげた。部落は、かれと、ボガトウイリョーフ老人と、それにバンテレイ・プロコフイェヴィチとを、ヴォーシエンスカヤへ派遣することにした。

村の集会でも、バンテレイ・プロコフイェヴィチは、他の代表たちといっしょに、コサック会議参加代表に選ばれた。かれは、その日のうちにヴォーシエンスカヤから帰ってきたが、翌日には、ノヴォチュルカツスクの会議へ間に合うように着くため、嫁の父親といっしょにミレエロヴォに赴くことに決めた。（ミロン・グリゴリエヴィチは、ミレエロヴォで、灯油、石鹼その他の家庭用品を手に入れる必要があった。ついでにかれは、モホフの製粉所のために、節とバビット（軸受用合金）とを買い入れてやり、鞘をかせぐつもりでいたので）。

夜のひきあけにかれらは出発した。ミロン・グリゴリエヴィチの黒馬（お）どもが、軽々と四輪馬車を運んでいった。舅たちふたりは、色模

様のついた座席に並んで腰かけていた。丘をやっと登りきったところで、ふたりは話をはじめた。ミレーロヴォにはドイツ兵が駐屯していた。それでミロン・グリゴリエヴィチは、いささか心配そうな色を見せて問いかけた。

——ところで、どうでございような、お舅つあん、ドイツ人のやつらに、おどしつけられるようなことはねえだろうかね？ 性質のよくねえやつらだからね、まったく、口ん中へ轅でもおしこんでやりてえくれえだよ。

——なあに、そうでもあるまい。——バンテレイ・プロコフイェヴィチが、説いてきかせるような口調で言った。——マトヴェイ・カシュリンがな、こないだ、あっちへ行行って来たというだが、ドイツ人はびくびくしておると言ってやしたぞ……コサックには手出しをするのを、おっかながっているそやな。

——へーえ、そうかいや！——ミロン・グリゴリエヴィチは、きつねのような赤ひげのなかで苦笑いすると、桜の枝でつくった鞭の柄を、しばらく弄んでいた。かれは、目に見えて安堵の様子を見せ、話題を転じた。——どう思いなさるね、どういう政權をうち樹てたもんでございような？

——アタマン（頭目）を据えるだね、自分たちのを！ コサックのをな！

——そうありてえもんだな。上手に選ぶこつたな！ ジブシーが馬にさわつてゐてえに、將軍たちをよくよく吟味してみることだな！ まちがわねえようになあ。

——選び出すでございようわい。ドンは、まだまだ知患者にや事を欠かねえだからな。

——そうだとも、お舅つあん。……ばか者と知患者とは、薛かねえでも生えてくるもんでござすよ。——ミロン・グリゴリエヴィチは、目を細めたが、そばかすだらけのその顔には、悲しみのかげがさしていた。——わしはな、うちのミチカを一人前の人間に仕上げてや

りてえ、士官になるように勉強さしてやりてえと思つておつたが、あいつは、教区の学校を出ねえうちに、次の年の冬にや、逃げだしてしまいがつたよ。

ポリシェヴィキーを追いかけて、どこかへ立ち去って行つた息子たちのことを思い、ふたりはしばらく黙りこんだ。でこぼこ道をゆく馬車は、瘧にかかったようにがたがたふるえた。まだ擦り減つていない蹄鉄をかちかちいわせながら、右側の黒馬が脚をもつらせた。座席が揺れ、びたりくつて腰にかけているふたりの舅は、まるで産卵期の魚のように脇腹をすり合わせるのだった。

——部落のコサックどもは、いったいどこに行つておることやらなあ？——バンテレイ・プロコフイェヴィチがため息をついた。

——ホビョール河沿いに進んで行きやしたよ。カルムイク人のフェードトカがクムイルジュエンスカヤからもどつてきただが……やつは馬をだめにしたのでござすよ、もどつてきていうことにや、なんでもみんなはチシヤンスカヤ村の方向へ道をとつておるらしいとおつたよ。

ふたりはまた黙りこんだ。そよ風が背中を冷やした。うしろのほう、ドン河のむこうには、森や、草地、湖水や、草原の禿地が、朝映のぼら色の炬火のなかで眩そかに、無言のまま燃えさかっていた。砂丘は黄色い蜜房の蜜の表皮のようになって横たわり、あわだつ波はらくだの瘤さながらにぼんやり青銅色に反射していた。

春は無愛想な顔つきで訪れていた。エメラルド（緑玉石）のような森のうす緑は、もはや濃緑の生羽に代わり、草原は花をひらき、氾濫した水は、牧草地に光りかがやく無数の水溜りをのこしてひいてしまつていたが、けわしい勾配のもの、崖のあたりでは、雪融けの天氣にむしばまれた雪が、まだ砂まじりの粘土に身をおしつけて、挑むように鮮やかな白さを見せていた。

二晝夜目の晩方、ミレーロヴォに着いて、穀物倉庫の赤茶けた脇腹の下のところに住んでいた知合いのウクライナ人の家に泊まった。翌

朝、朝食をすませたのち、ミロン・グリゴリエヴィチは馬車に馬をつなぎ、商店街へ出かけていった。鉄道の踏切りを無事に通り越したところで、かれは、生まれてはじめてドイツ兵を見かけたのであった。国民軍の兵隊が三人、かれをさえぎるようにしてやってきていた。そのなかのひとり、栗色のちぢれたほおひげを耳まで生やした背のひくい兵隊が、呼びかけるように手をさつとふった。

ミロン・グリゴリエヴィチは、不安そうに、どうなることかと、くちびるをかみかみ、手綱をゆるめた。ドイツ兵はそばへよってきた。上背のある肥ったそのプロシヤ人は、まっ白な歯を光らせて笑いながら、仲間と言った。

——おい見ろ、これこそ本物のコサックだ！ 見てみろ、そのうえコサックの制服まで着てやがる！ こいつの息子どもは、おおかた、おれたちを相手に戦ったんだぞ。生けどりにしてこいつをベルリンに送りどけてやることにするか。とてつもなく素晴らしい見世物になるぞ！

——おれたちに用があるのは、こいつの馬だ。やつのはうは勝手にどこへなりと行かせるがいい！——栗色のほおひげをした細っこいほうが、にこりとみせず、そう答えた。

かれは、おそるおそる馬を遠まわりして、馬車のそばに寄ってきた。

——おい、じいさん、降りるんだ。おまえの馬がおれたちには入用なんだ。その製粉所から駅まで粉を運ばなきゃならないんだ。降りろと言っているんだ！ 馬を受取りにゃ衛戍司令官のところへ行ってくれ。——ドイツ兵は、目で製粉所を指し、自分の指図には疑問を抱くことをゆるさぬぞという身のこなしで、ミロン・グリゴリエヴィチに降りるように告げた。

あとのふたりは、ふり返りふり返り、笑いながら製粉所のほうへ歩いて行った。ミロン・グリゴリエヴィチの顔は、さつと血が射し、灰色じみた黄いろい色に変わった。かれは、座席の背に手綱をまるめておくと、馬車から若者のしぐさでとびおりて、馬の前に進み出た。

《あいにく剪つあんがいねえ！——かれはちらつとそう考え、ぞつとしてきた。——馬をとりあげられるのか！ 畜生、こいつは困ったことになったわい！ 弱ったな！》

ドイツ兵は、かたく口をつぐんで、ミロン・グリゴリエヴィチの袖をつかまえ、身ぶりで製粉所のほうへ行けと指した。

——よしやがれやい！——ミロン・グリゴリエヴィチは、さつと前へ進み出ると、目にみえて顔色を青くした。——さあ、寄ってきて見やがれ！ 馬は渡さねえからな！

かれの声の調子からドイツ兵は、答えの意味を察した。青みをおびたきれいな歯をむきだして、かれの口は、不意に獣のようにひらいた。——瞳が恐ろしい色をおびてひろがり、声は力づよい金切声になった。ドイツ兵は、肩にかかっている小銃の負革をつかんだ。その瞬間、ミロン・グリゴリエヴィチに若さがかえってきた。かれは、ほとんど手をふりあげずに、兵隊のような一撃をドイツ兵のほおにぶつつけた。一撃をくらって相手の頭がぐくりとゆれ、顎にかかっている革紐がぶつり切れた。ドイツ兵は、倒れ、ついで起ちあがろうとしながら、暗紅色のどろっとした血のかたまりを吐きだした。ミロン・グリゴリエヴィチは、もう一つ、こんどは、ほんのくぼを殴りつけ、それからあたりを目をくばって、身をかがめ、すばやく小銃をひろいあげた。この瞬間、かれの頭はすばやく、そして恐ろしく正確に働いた。馬を反転させるときには、かれはもう、ドイツ兵が背中めがけて射ってこないことを知っていた。ただ、鉄道の柵のうしろや、線路のうえから歩哨が見てはいしまいかと、それだけを心配した。

黒馬どもは、競馬のときでさえ、こんなに激しい駆け足で走らされたことはなかった！ 馬車の車輪のほうも、婚禮の時さえこんな目には会わなかった！ 《主よ、のがれさせてくだせえまし！ 主よ、救い給え！ 父の御名において！……》ミロン・グリゴリエヴィチは、馬の背に鞭をあてながら、心のなかで呟きつづけていた。が、生来の貪欲が、あやうくかれを亡ぼすところであった。置いてきた膝掛けを

とりに宿にひきかえそうかと思つたのだ。けれども、分別のほうが勝ちを制した。——かれは、わきへそれた。そしてかれ自身、あとで語つたように、オレーホヴァヤ村までの二十キロというものを、二輪車に乗つた予言者イリヤよりも速くすつとばしたのである。オレーホヴァヤの知合いのウクライナ人のもとにかけつけると、半死半生の態で、主人に事の次第を物語り、かれと馬とをかくまってくれるように頼んだ。ウクライナ人は、かくまうにはかくまってくれたが、先まわりして言つた。

——かくまつてはあげようが、グリゴリーチ、ひどく責められてたら、おら言つてしまふぞい。そうしなきゃ、おら算盤が立たねえからな！ 家を焼かれて、縄つきになるかもしれないぞい。

——まあ、頼むから、かくまつてくれないさや！ あとで、おまえの望み次第にお礼はするから！ ただ、死なせねえでくれろよ。どこでもええだ、かくまつておくんな。羊を一群つれてくるからな！ ひと腹目の牝羊十頭でも惜しみはしねえだ！——ミロン・グリゴリーエヴィチは、納屋に馬車をひき入れながら、そんなふうにおがみたおし、お礼を約束した。

死よりも追跡にかれはおびえていた。ウクライナ人の屋敷に夕方までいて、日が暮れかかるとともに逐電した。オレーホヴァヤからの道のりを、無我夢中で、馬をとばした。馬からは両側に汗が雨とたれ、馬車は、車輪の輻が一つに見えるほどの速力で、がらがら音たてて走つた。かれは、ニジネ・ヤプロノフスキー部落のそばまで来て、やつとわれにかえつた。そこに行きつく前に、奪いとつた小銃を腰掛けの下からとりだし、内側に色鉛筆で散らし書きのしてある革条をながめて、安堵したように吐息をついた。

——どうだい、追つつけめえが、畜生どもめ？ おまえたちは雑魚だよ！

ウクライナ人のところには、かれは羊をとどけなかった。秋になつて通りがかりにちよつと立ち寄つたとき、主人の期待するような眼ざ

しにこたえて、かれは言つた。

——牝の子羊は死んでしまつたわ。羊はどうもうまくねえ……お世話になつたお礼に、家の畑でできたなしをもつてきやしたぞい！——途中で傷だらけになつた二軒ほどのなしを馬車からおろして、ペテン師じみた目をわきにそらしながら言つた。——うちのなしはとってもいいなしだよ……困つてあつたもんでな……—それだけで、おさらばであつた。

ミロン・グリゴリーエヴィチがミレーロヴォから馬車をとばしていったとき、片方の舅は駅に出頭していた。若いドイツの将校が、通行許可証を書いてくれた。そして通訳を通じてバンテレイ・プロコーフイエヴィチに何かとききただしたのち、安業巻をくゆらしながら、庇護するような口調で言つた。

——行つてきなさい。ただ分別のある政権があんたがたには必要だということをよく頭に入れておくことです。大統領でも、皇帝でも、好きなのをお選びなさい。ただし、一つ条件がある、つまりその人物が、統治者としての分別を失わず、われわれの国家にたいして忠誠な政策をとりうる人物であるということだ。

バンテレイ・プロコーフイエヴィチは、このドイツ将校を、いささか取つつきにくい感じでながめやっていた。話をする気がなかったの、かれは通行許可証をうけると、すぐに切符を買いに行つた。

ノヴォチュルカスクでかれを驚かしたのは、おびたらしい青年士官たちであつた。かれらは、群れをなして通りを歩きまわり、レストランにすわりこみ、お嬢さんをひきつれて散歩し、アタマン(頭目)の邸宅や、会議がひらかれるはずになっている裁判所の建物のあたりをうろつきまわっていた。

代表者たちの宿舎で、バンテレイ・プロコーフイエヴィチは、二、三人の同村人と、エランスカヤ村からやつて来ていたひとりの知合ひに出あつた。代表者のなかでは、平コサックの数が圧倒的で、将校たちは少なかつた。せいぜい数十人ぐらいのもので、それも、コサック

村のインテリゲンチヤ代表たちだった。州政權の選出については、どれを信じていいかわからない、いろんなうわさがとんでいた。はっきり決まっていたのは、アタマン（頭目）を選び出さねばならぬ、という一事だった。人気のあるコサック將軍たちの名があげられ、候補者が詮索された。

到着した日の夕方、お茶をのんだあと、パンテレイ・プロコフ・エヴィチは自分の部屋で家からもってきた食糧を食べようと思い、食卓につこうとした。かれは乾したこいの片をならべ、パンを切っていた。かれのわきに、ミグリンスカヤ村の者がふたりすわっていた。さらに二、三の者がそばへ寄ってきた。話は戦線の状況からはじまり、次第に州政權選出のことについていった。

——亡くなられたカレージン……あのかたに天国あれ……あのかたよりりっぱなおかたは見つかりませんな。——ほおひげの白くなったシュミリンスカヤ村の者がため息をついた。

——その通りじゃ。——エランスカヤ村のコサックが相槌をうった。

話に加わっていたひとり、ベッセルゲネーフスカヤ村の代表のコサック二等大尉が、いささか性急に口をきった。

——適当な人物がないとな？ 何をおっしゃる、みなさん？ じゃあ、クラスノフ將軍は？

——どのクラスノフですかい？

——つまり、別にあるとおっしゃるのかね？ そんなことをたずねられるとは、とんでもない。有名な將軍で、第三騎兵軍団司令官ですよ。知恵のあるおかたで、ゲオルギー・勳章の佩用者で、知れわたった司令官ですわい。

二等大尉の夢中になった、有頂天な言分が、ひとりの前線部隊代表者を立腹させた。

——事実を申しあげるとな、あの將軍の才能なるものを、知っておりますわい。しようなない將軍でな！ 対独戦では功労があったが、

それから先は、もうおしまい。革命がなくなつたって、せいぜい旅団長どまりというところだね！

——クラスノフ將軍のことを、よく知りもしねえで、あんたは、どうしてそういうことが言えるのかね？ そのうえにだ、みんなから尊敬をうけておる將軍をだ、よくもそんなふうに批評できたものだね？ あんたは、おかた、自分が平コサックだということを忘れなすつたと見えるな？

二等大尉は、これでもかこれでもかというように、つめたい言葉をあびせかけた。相手のコサックは呆然とし、腰くだけして、悄然と嘆きはじめた。

——わたしは、上官殿、あのかたの部下として勤めておつたときの様子を申しあげておるのです……あのかたは、オーストリア戦線でわしらの連隊を鉄条網にひっからせたですからな！ それで、わしらはあのかたをしようがないと言つておるのですわい……だが、どんな人か、そりゃだれにもわからねえことだ……ぜんぜん、反対かもしれん……

——じゃあ、なんでゲオルギー・勳章を授けられなすつたんじゃね？ ばかな！——パンテレイ・プロコフ・エヴィチは、こいの骨をひっかつたので、ゴホンと咳いて、それから出征兵にくつてかかった。

——あんたは、愚かな心に憑かれなすつたもんじゃ。だれかれの区別なしに悪くいひなさる。何もかもが、あんたによろしくないのじゃな……とんでもない流行にとつつかれたものじゃ！ ちつとばかり口数をつつしみなすつたら、いざこざも起こらなかつたらうに。そうすりゃ、知恵の儲け得というものじゃつたに。だばらばかり吹きまくりおつて！

チュルカツスク一带と、下流のコサックたちはすべて、クラスノフを支持して、梃子でもうごかなかつた。ゲオルギー・勳章佩用者ということが、年寄りたちの氣に入っていた。日露戦争のときいっしょに勤務していた者たちも少なくなかつた。近衛兵、上流社会の出身、教養

の高い人物、宮廷につかえ、皇帝側近のひとりであったというクラスノフの過去が、将校たちの魅力となっていた。クラスノフ将軍が一介の武弁でなく、かつて『ニワ』誌の付録に将校生活をえがいた短編小説をのせ、それで好評を博した作家のはしきれであるという事情が、自由主義的なインテリゲンチヤに満足をあたえていた。作家とあれば、文化人にはちがいない。

宿舎では、クラスノフをかつぎあげるための、はげしい煽動が行なわれていた。かれの名の前には、はかの将軍たちの名は色褪せてしまった。クラスノフをかつぐ将校たちは、アフリカン・ボガーエフスキーについて、ひそかに次のようなうわさを流布していた。ボガーエフスキーとデニキンとは一つ穴のむじなだ、それで、もしボガーエフスキーをアタマン（頭目）に選ぶとすれば、ポリシェヴィキを追っばらい、モスクワに侵入した途端に、コサックの特権と自治はおしまいだ、と。

クラスノフにも敵はあった、教師であるひとりの代表が、うまくゆきそうもないのに、將軍の名をきずつけようと努めていた。この教師は、代表たちの部屋をうろつきまわっては、コサックたちの耳に、針のある言葉で、まるで蚊の鳴くような口調で、ささやいていた。

——クラスノフだって？ 疥癬かきの將軍で、三文文士でさあ！
宮廷のにやけ男で、おべっか使いだよ！ いわば、民族資本を手に入れた、民主主義的童貞を守り通そうと欲している人物ですよ。まあ、見ててごらんなさい。かれはドンを、相手はだれでもよろしい、最初の買手の手に渡してしましますから！ 小人物ですよ。政治家としてはゼロだ。アゲーエフを選ぶ必要がありませんね！ かれはぜんぜんちがいますよ！

けれども教師は成功しなかった。そして会議の三日目にあたる五月一日には、つぎのような声がひびき渡った。

——クラスノフ將軍を招け！
——どうぞそうしてくれ……

——たのむぞ……

——お願い……

——われらの誇りだ……

——この場へ来てもらって、いろいろ話してもらったらどうだ！
——大広間は沸きかえった。

将校たちが荒々しく拍手した。すると、コサックたちもかれらのほうを見い見い、あまりひびかぬ拍手で、不器用に、拍手しだした。労働になめされたかれらの黒い手から出たひびきは、かきかきしていて、大袈裟で、不愉快でさえあったともいえる。棧敷や廊下をうずめている令嬢や奥方たち、将校や大会参加者たちのふくらしたこぎれいな掌のやわらかい拍手の音楽とは、それはまったく対蹠的であった。

勲章や記念章をいっぱいちりばめ、肩章やその他將官の階級章をつけた正服を着こんで、年に似ず均齊のとれた長身美男の將軍が、颯爽と舞台に歩をすすめるとき、会場は拍手の小波と怒号におおわれた。感動と興奮の面持で、絵にかいたようなポーズをとりながら突っ立っているこの將軍に、多くの人々は帝国の、在りし日の威力のくすんだ反照を見た。

バンタレイ・ブローコフ・エヴィチは涙をながし、長いあいだ、軍帽のなかから取り出した赤い色のハンカチで鼻をかんでいた。《これこそ將軍だ！ 一目で、人物だということがわかる！ 皇帝そのもののようだ。いや、見かけは、さらに皇帝にふさわしいくらいだ。亡くなられた、アレクサンドル陛下そっくりだわい！》——かれは、ランブのそばに立っているクラスノフを、感動をこめて見やりながら、そう思いつづけた。《ドン救済大会》と呼ばれたこのコサック会議は、ゆっくり会議をつづけた。会議議長のコサック一等大尉ヤノフの提案によって、軍隊内の身分に応じて用いられている肩章とあらゆる記章とを帯びることが、決定として採用された。クラスノフが、名人芸的演説を行なった。かれは《ポリシェヴィキに侮辱されたロシア》に

ついで、その《往古の威力》について、ドンの運命について、切々と語りつづけた。現在の状況をえがいてみせ、手短かにドイツ軍による占領にふれ、演説が終わるにあたって、ポリシェヴィキー敗北後のドン州の自立的存在を感情をこめて語りだしたときには、騒然たる喚声（わんせい）をよびおこした。

——この威力あるコサック会議こそ、ドン州を支配するであろう！革命によって解放されたコサックは、コサック生活のすばらしい、昔ながらの制度を、あげて復活させるであろう。そして、われらは、遠き昔、われらの先祖が叫んだごとく、朗々たる声をはりあげて叫ぶであろう。《石の砦（とりで）のモスクワにいます白帝（異民族がロシア皇）よ、万歳！また静かなドンにあるわれらコサック万歳！》と。

五月三日の夜の会議において、反対十三票、棄権一票にたいする百七票で、クラスノフ少将がコサック軍アタマン（頭目）に選ばれた。クラスノフは、自分がこの会議に提案した基本法を確認してくれること、そうして自分に無制限の頭目権を付与せよという条件をもち出し、一等大尉の手から、アタマンの権標をうけようとしなかった。

——わが国は滅亡の前夜に立っておるのである！アタマンにたいする全幅の信頼ということとを条件としてのみ、わたしはアタマンの権標をうけることにしましょう。ドンの意志の最高の表現者であるこのコサック会議が、信頼していただけることがわかっていて、ポリシェヴィキーの放埒（はなづか）と無秩序に対抗して、確固たる法的規程がうちたてられる場合、確信をもち、かつ果たされるべき義務をよろこんで意識しつつ働くことを、事態は要求するからであります。

クラスノフの提案した法律は、手早く裏がえして、そつと修復した旧帝国の法律にすぎなかった。会議としては、どうして、これを採択しないわけがある？よろこんで採択されたのであった。かえって改悪された旗——青と赤と黄の縦縞（カルムイク人を示す）さえも——昔をしのばせた。わずかに政府の紋章だけが、民族精神に阿（あ）ねって、根本的な変更を加えられた。両翼をひろげ、爪を伸ばしている猛々しい双

頭の鷲（じゆ）に代わって、毛皮帽をかぶり、軍刀、小銃、装具をつけ、酒樽にまたがっている真正正銘のコサックが描かれていたのである。

おべっかで少し間のぬけた代表のひとり、卑屈な質問を出した。——閣下におかせられましては、基本法として採択された諸法律につきまして、なんらかの変更、改変の御提議はございませんでしょうか？

クラスノフは鷹揚（たうよう）な微笑をうかべ、冗談（じょたん）をとばそうと試みた。かれは、含みをもたせて、会議参加者をぐるりと見まわし、全員の注意に甘やかされた人物らしい声で答えた。

——出してもいいですよ。第四十八条、四十九条、五十条の旗、紋章、頌歌（じゆた）についてですがね。諸君は、赤旗以外のあらゆる旗、ユダヤの五芒の星、あるいはフリーメーソンの記章以外のあらゆる紋章、また《インターナショナル》以外のあらゆる頌歌を、わたくしに提案されてよろしいのです。

笑いさざめきながら、会議は諸々の法律を確認した。そしてその後しばらくのあいだ、アタマン（頭目）の冗談は口から口を渡りあるいた。

五月五日に会議は散会になった。最後のいくつかの演説がびびき終わった。クラスノフの右腕、南部集團軍司令官デニソフ大佐は、ちかいうちにポリシェヴィキー一揆（しゅう）を踏みにじつてみせると約束した。会議参加者たちは、首尾よくいったアタマン選挙と戦線総合報告とに、安心もし、喜びもして散っていった。

ふかい感動につつまれ、はりさけるような喜びにみたされて、バン・トレイ・ブローコフ・イェヴィチは、ドンの首都を後にしていた。かれはアタマンの権標が信頼しうる手におちたことを信じ、間もなくポリシェヴィキーはうち砕かれてしまうだろう、そして、息子たちも家に帰ってくるだろうと、信じきっていた。老人は、車窓のそばにすわり、小卓に肘をついていた。かれの耳のなかでは、まだ別れをつげるドンの頌歌のひびきが波うっており、さまざまな更生の言葉が、意識のど